



## 第36号 (2003年4月) 新入生歓迎号

### ヴェルクマイスター・ハーモニーを 知っていますか

牛 津 信 忠

大学の学びに、あなたは何を求めますか。この現代社会を整備し調和を齎<sup>もたら</sup>す大志を抱く方、或いは、自分の混沌とした内面の声に耳を傾け、そこからあなたが生きていく道筋を探している方等さまざまでしょう。何れにせよ、錯綜する情報の大海に船出したあなたは、大学生活の中で、これからの生き方の基盤を築いていく道に立ったのです。

私は、このような若き人々に接するとき、いつもある人の名が頭に浮かぶのです。それは、ヴェルクマイスターという人物です。彼は17世紀のオルガン奏者で、また音楽学者でもあり、音楽の世界に標準化ないし一定の秩序<sup>もたら</sup>を齎したといえる。彼によって誤差のある音の世界から「純粹調律」された「平均律」という音律が確定されていったのです。それは同時に今日私たちが耳にする美的で、心地よい音の世界の形成でもありました。誤差や錯綜から標準化・整備された世界へ、これは音楽における社会性の確立とも表現できるでしょう。

しかし、いうまでもなく、この世には極めて美的ならざるノイズ的状况もある。現実世界では、美的終結へ到ることのできない、社会的にはノイズとも思える個の内なる叫びが錯綜しています。

ところで、昨年、このヴェルクマイスターの「純粹調律」を社会事象とオーバーラップさせながら巨大なテーマに取り組んだ映画「ヴェルクマイスター・ハーモニー(監督・脚本/タル・ベーラ)」<sup>(1)</sup>が日本でも封切られ、静かな旋風を巻き起こしました。

映画の粗筋にふれると、ある町に世界最大の鯨を見世物にしたサーカスがやってくる。その団を率いるプリンスという男の思想に煽動され、鯨の周りに集まった群衆がノイズの暴発ともいえる破戒行為を引き起す。それとヴェルクマイスター批判の研究に日常を過ごす音楽学者エステルが重ねられて描かれる。エステルは現代の「音楽もその

調整も、エコーも、その溢れ出る魅力も、誤った音声に基づいている」というのである。彼はヴェルクマイスターによって、自然な感覚が捉える音の世界が一掃されてしまったという。

この映画に関連して、中沢新一は、標準化・整備された世界の広がり、「自然な感覚」による「固有文化を破壊」した。「世界は標準化された『ヴェルクマイスター・ハーモニー』に覆われている」と述べている。映画は、さらに先鋭化した暴動による破壊と、エステルに心を寄せながらも調和ある世界との間で揺れ動くヤーノシュという青年を描いてゆく。

この映画は音楽の議論に何らかの結論を見い出そうとするものではありません。この映像作品に接する時、我々は、社会に調和と安定ある文化的整合性を築くことと、社会的なノイズ扱いされる個々の叫びに耳を傾ける、或いはそのどちらにも応答することについて改めて問われている思いが致します。問いに答えるべく、人間を広く知る、各人の叫びを聞き分ける。不協和音とノイズにも耳を傾ける。さらに、調和ないしハーモニーを奏でる社会をも探り求める。青年は、いつもノイズと調和という両者の間を揺れ動く、映画の描く悩めるヤーノシュ的存在なのかもしれません。しかし、揺れ動きながらプリンス的煽動者が示す虚構、或いはまがい物の調和や秩序を見定めることを忘れないように。

さて図書館(マルチメディアセンターとしての)は、情報の大海を目の前に広げ、諸君を誘ってくれている。あなたは社会や世界についてのヴェルクマイスター・ハーモニーを一層探り求めますか、それとも個々の叫びに耳を傾けますか、それとも、それとも...。大学生となったあなたの問いが始まろうとしています。さあ、足繁く図書館に通い、知の大海を泳ぎ渡っていきましょう。

(人間福祉学科教授)

(1)DVDで本学図書館所蔵

## ブリティッシュ・ライブラリーの憶い出

澁谷 浩

図書館との付き合いは中学生以来浅からぬものがあるが、一番強く印象に残っているのはブリティッシュ・ライブラリーである。英国図書館と訳しておこう。ただし私の利用したころ(1970-71年)は、まだ制度上もブリティッシュ・ミュージアム(大英博物館)の一部局であり、所在地も博物館内部の中央部、大きな丸天井の下に在った。現在ではセント・パンクラス駅西隣の新館に移って三十年経ったが、私の憶い出の英国図書館はミュージアム内のそれである。私は前任校の在外研究員として約一年、この図書館に朝から夕方まで通い詰めた。十七世紀のピューリタン革命期の文献を読むためである。一年の後半に論文を書いて英国人の研究者たちに送ったあと、彼らを歴訪して批評を仰ぐつもりだったから何しろ時間がない。三百年昔のザラ紙を捲るのももどかしい気持ちで読みふけた。

と同時に私は読書そのものから生ずるものではない、ある感慨を抱き続けていた。学生時代に読んだギッシングの『ヘンリー・ライクロフトの私記』(1903年刊)が念頭にあったからである。「文字通りロンドンで餓死に瀕したときのこと、ペンでは食ってゆけそうにもないと思えたときでも、心配もどこ吹く風かとはばかり超然として大英博物館での読書におびただしい日数をすごしたものだ。朝食はバタなしのパンですませ、昼食用にもう一片のパンをポケットに用意したまま、すぐ役に立ちそうにも思えない幾冊かの本を前にして、あの大読書室の机に向かっていたことを思いだすと、今さらのように慄然とするのである(平井正穂訳)。ライクロフト(実はギッシング自身)は自分の若き日をこう想起しながら、回顧の情にひたる。博物館内の図書館には、二百年にわたって幾万ものライクロフトが丸天井の下で、食うものも食わないで孜々と自学自修したのだ。英国の文化はこういう人たちによって支えられた、と言ってよいだろう。これらの若者たちの間には、そう若くもない外国人もまじっている。円形の大読書室のK13番の座席は、カール・マルクスが常用していた席である(という伝説だ)。マルクスはここに座って『資本論』を書いた、とされる。そ

の席に座って見ると、そこは同心円状に幾重にも並んでいる座席の一番外側の列に属する席で、後ろを振り向くと辞書や参考書が壁面一杯に並んでいる。なかなか便利で、マルクスでなくとも愛用したい席だ。

そういうわけで、壁や机に染み込んだ歴史と伝統に促されるままに、いやが上にも読書に励まざるを得なかったのである。そればかりか洗面所に行ってもライクロフトが追いかけて来る。私が向かって立っている洗面台に、ある日の彼も同様に向かい合ったのだ。ところが相対した鏡の傍の新しい張り紙が彼の眼に入った。「入館者は洗面台で手や顔のみを洗うよう、お気をつけ下さい」。手と顔より広い面積を洗って来たし、その時も洗おうと思っていたライクロフトは思わず笑い出してしまう。——いや、これは蛇足だ。私の言いたかったことは、図書館で(机に突伏して眠ったり休息したりしないで)学ぶ、ということは、先輩から後輩へと受け継がれ貯めこまれた館内の雰囲気によって促されて出来ることである。これを言おうと

(2003年3月末まで政治経済学科教授)

(2)平井正穂訳『ヘンリー・ライクロフトの私記』934-5 G47p

## 1冊の本

須山 名保子

大学院修士課程を終わると同時に、私の生活は二つの辞書の原稿作りを中心に進み始めた。古典語辞典<sup>③</sup>と方言辞典<sup>④</sup>の仕事であった。それぞれ20年・25年のちに幸いにも形を成した。その後も目標意識の明確な企画の辞書に参加を許されて今日に到る。つまり未だに辞典に関わる日常である。

優れた指導者に導かれたこと、誠実な協力者に恵まれたことなどのどれか一つが欠けても「辞書屋」の人生は潰えていたと思う。それに加えて私には、無くてはならぬ支えのあることを、ここに書き留めておきたい。

用例の探索に倦み疲れたとき、難解な用例に行き当たったとき、貧しい手持ちの方法では語義を分析しあぐねたとき、私は1冊の本のページを繰り、かつて引いた朱の線をまた辿る。

亡きドイツ文学者高橋健二著『グリム兄弟』(新潮選書1968刊)がその本だ。グリム童話の収集・

編纂で名高いグリム兄弟は、20代に『子どもと家庭の童話』<sup>6)</sup>を出し、兄ヤーコブは音韻法則、ドイツ語文法(未完)など言語学・比較言語学分野に業績を遺し、弟ヴィルヘルムは民話研究の基礎を築く。時代は日本で言えば幕末。18世紀の末に成人し、19世紀の前半を故国の激動状況や経済的苦境と闘いながら研究を続けた兄弟は、その晩年ドイツ語辞典の編集に着手する。

さて、第7章「ドイツ語辞典」<sup>7)</sup>では、忘れられない文言にいくつも出会う。「グリム兄弟は、ことばと文学が国民を精神的に結びつける唯一のものであると考え、それに寄与することを使命として、辞典の編集に携わったのであるが、グリムの『ドイツ語辞典』は、ドイツが東西に分裂している状態において完成された。悲劇的勝利というほかはない。」ベルリンの壁の撤去された今日ここを読み返すと、二重に胸が打たれる。「見出し語の定義的説明より、歴史的な文例によって語義を帰納させようという行き方は、グリム辞典の長所とも短所ともなったが」は、より具体的には「過去3世紀の間に形成されたドイツ語を包括するはずで、すなわち、ルターに始まりゲーテで結ばれる」(弟による報告)という編集方針を力強く語るものである。その作業は苦しかった。

「終日、こまかい雪がひっきりなしに空から降ってきて、そこら中が測り知らぬ雪におおわれてしまいでるように、わたしは、あらゆるすみずみから、すきまから、自分に押し寄せてくる大量のことばのため、いわば降りこめられてしまう。ときどき、立ちあがって、何もかも払い落とすたくなる。」

ヤーコブの言葉である。あの偉大な先達にしてこの嘆きがある。いや、大きければこそ出せる言葉なのではないか。ヴィルヘルムは21年かかってDだけを仕上げ「ことばの雪片に埋められるように死んだ。」著者はこのように哀悼する。

弟の没後も仕事は続き、兄の死後は他の有志者たちによって120年余のちに「校了」に到る。

(2003年3月末まで日本文化学科教授)

(3) 大野・佐竹・前田編『岩波古語辞典』813 6 O67

(4) 『奄美方言分類辞典』818 97 O72

(5) 940 28 Ta33

(6) Kinder-und hausmarchen 909 3 G86

(7) Deutsche Wörterbuch 33v . 843 G86

## 第二の教室

101MC006 樋口 洋

私が聖学院大学で学んだ6年という時間を振り返ってみると、図書館で過ごした時間が非常に多いことに驚きます。図書館は、私の大学生活において切っても切れない場所でした。大学の図書館というと、「ちょっと近寄りがたい場所」と感じる人も意外と多いのではないのでしょうか。私も大学に入学した当初はそう思っていたひとりです。本を読んでいると、まぶたが重くなる類の人間ですから、その当時、私にとって図書館というのは「昼寝の場所」でしたし、何百ページもある難しい本は少々硬い枕でした。図書館の寝心地はそれほど悪くはなかったのですが、ある日突然、「このまま大学に昼寝をしに来ていいのだろうか?」と目が覚めると同時に頭まで目覚めてしまいました。その時から、私にとって図書館は「昼寝の場所」から「第二の教室」へと変わりました。

私たちが大学で学ぶ場合、大きく二通りの勉強が必要となります。ひとつは講義を通して学ぶことです。これは、先生の講義を「受身的」に学ぶということです。もうひとつはその講義を通して学んだことに基づいて、今度はさらに自分自身で「主体的」に学ぶことです。これら二つのどちらが欠けても「大学で学ぶ」ことにはなりません。そう考えると、大学には受身的に学ぶ「教室」と主体的に学ぶ「図書館」という二つの学ぶ場所があるわけです。教室の先生は語りかけてくれますし、質問をすれば答えてくれます。しかし、図書館の本はひとりで語りかけてはくれませんか、答えは自分自身で見つけるほかありません。確かに膨大な数の書籍の中から答えを探すと思うと、気が遠くなります。しかし、「枕の下に本を置いて寝たら、翌日にはその本の内容が頭に入っている」、なんてことはありませんし、先にも述べたようにそれは私が実証済みです。何の興味もない本を読むのは苦痛以外の何ものでもありません。ですから、まず「知りたい」という欲求を大切にしてください。そして「なぜ?」という疑問をもって図書館という「第二の教室」に足を運び、今まで見えなかったさまざまな世界が目の前に広がると思います。

(アメリカ・ヨーロッパ文化研究科(博士前期課程))

## 図書館との付き合い方

099P028 大城麻耶

御入学、御進級おめでとうございます。皆さんは、今まで図書館とどのように付き合ってきましたか？私の学生生活は図書館なしでは語れないほど、様々な場面で付き合いがありました。

大学生活で初めて図書館に足を踏み入れたのはいつか、実はあまりよく覚えていません。確か講義のレポート内容に関する文献を探しに行った時だったと思います。その時は、やはり高校と違って幅広いジャンルのものが数多くそろっているな、と驚いたものです。ある時、ふと文献に目をやると、テレビ番組から発行された馴染みやすい本が目につきました。これは、すごい発見でした。小難しい本ばかりが大学の図書館に並んでいるのかと思い込んでいたので、こんなに実用的な本や話題になった本まで並んでいるのかと思い、さらによく図書館に行くようになりました。

私の場合、ありがたい事に司書の授業とゼミで2回図書館ツアーを体験しました。このツアーによって、図書館内の本のある場所が分かったり、文献の検索方法が分かたり、なお図書館が快適で使いやすくなりました。お薦めですので、是非一度参加してみてください。なかなか利用しにくいと思うようであれば、新学期という節目の時期はいいチャンスだと思います。レポートを書いたり、新聞を読んだり、気になる本を探したりして、特に3年生の頃は毎日図書館に寄っていました。もともと、本に囲まれ、落ち着いた環境は、いい意味で危機感と緊張感となって私を常に刺激していました。私の大学生活と図書館との付き合いは学年が上がるにつれ、深まっていきました。

ただ最近一つ気になる事は、図書館の静粛さを守れない人がいることです。「図書館」という場所は確かに自分だけの時間を過ごせる独特な雰囲気を持つ場所です。そこを利用するのは良いことです。でも、人に迷惑をかけることは絶対にしないで欲しいと思います。

大学生活は出会いの宝庫です。「思いこみ」を捨てて一步を踏み出せば、そこにはかけがえのない「出会い」があります。自分なりの「付き合い方」を見つけて有意義な大学生活を送ってみませんか？

(政治経済学科)

## 図書館で読みたい本をみつけよう

099W026 枝小由美

私は、大学に入るまであまり本を読む方ではありませんでした。

大学では講義の入っていない長い空き時間などに図書館を利用するようになりました。最初は、どんな本を読んだらいいか分からず、リクエストコーナーに置いてある本の中から自分の読みたい本を探しました。また、インターネットや新聞などに載っている本の情報を見て、自分の読みたい本をリクエストしました。

このようにして、少しずつ本を読み、自分の気に入った本が増えていくにつれ、本を読むことが楽しくなりました。

大学生活では、図書館を利用する機会が多くなると思います。自分の読みたい本を見つけ、また図書館になかったらリクエストをしてたくさんの本を読んでみてください。

(人間福祉学科)

## 本との出会い、人との出会い。

099A092 仲 義之

新入生の皆様、入学おめでとうございます。これからの人生を充実したものとし、また、新しいステップに入った勉学をやり多きものとする為に、ぜひともこの四年間を大切にしてほしいです。

まず、はじめに言いたいのは「人生は出会いだ」ということです。

家族との出会い、友人との出会い、先生との出会い、一つ一つの出会いが、皆さんの人生を方向付け、導いていきます。重要なのはそれぞれの出会いに関係づけをし、意味づけを行っていくことです。みなさんが主体となって、それぞれの出来事を色付けていくのです。そして、人との出会いだけではなく、人生の重要なワンシーンに「本との出会い」があることが、大学生にはとても意味深いものとなります。

もともとキリスト教の精神に強い関心があった僕は聖書やアウグスティヌス、神学関連の本をしばしば読みました。最終的にはニーチェを卒業研究に選ぶこととなり、神学というよりもむしろ哲学の研究となっていきましたが、四年間の読書生

活を通して思ったのは、「古典」といわれる書物を読むことの意義深さでした。

現在、インターネットなどで、最先端情報はいつでも入手できるようになりました。しかしそこで得られる情報は、どこか味の薄いものとなりがちです。コンピューターのデジタル化した文章は、実際の紙に書かれた文と違って、いくらでもとりかえがきき、温かみを失いがちです。そこには、「出会い」の感情も失われがちです。

それに比べて、「古典」といわれる書物のよさは、時代を超えた普遍性ということの上にあります。例えば、ニーチェの『道徳の系譜』<sup>8)</sup>は100年以上も前に書かれた本ですが、その内容は、現代人の僕の心を打つ、普遍的な力を内在していると言えます。

本誌の読者中一人でも多くの方が、これからの四年間の内にそのような自分の「古典」に出会うことが出来ることを願っています。

(8)134 922 N71 (岩波文庫)

(欧米文化学科)

## 図書館からのお知らせ

### H.P.改訂のお知らせ

2003年4月に図書館のH.P.が改訂になります。

今までの機能をさらに生かせるように、トップページからすべての情報を入手できるようになります。ぜひご利用ください。

また、H.P.に加えてほしいことや図書館への要望などのご意見、感想もお待ちしています。

<http://www.seigakuin-univ.ac.jp/scr/lib.asp>

### 図書館イメージキャラクター募集

聖学院大学総合図書館のイメージキャラクターを募集します。たくさんの応募をお待ちしています。詳細は掲示板をご覧になるか、もしくは図書館カウンターにてお尋ねください。



応募をお待ち  
しています！

### ビデオ配架場所変更 & 館外貸出停止について

今まで、ビデオは2階閲覧室のビデオ書架に配架されていましたが、ビデオが急激に増加したため、2重3重にと配架せざるをえませんでした。そのために使いづらいつの声もあり、一部のビデオを司書室内に移動することにしました。ビデオ書架の隣に司書室内にあるビデオの一覧が置いてあります。必要な際はカウンターに申し出てください。

また、2003年度4月以降、映像資料(ビデオ・LD・DVD)の館外への貸出を停止いたします。館内利用に関しては従来どおり3階視聴覚室をご利用いただけます。多様な映像資料を提供するための処置ですので、ご了承ください。

### 雑誌バーコード管理について

2003年度受入の雑誌から、図書と同じようにバーコードによって管理することになりました。貸し出しの手続きが簡単になります。

### 図書館ツアーのお知らせ

新入生の方を対象とした図書館ツアー(館内の案内や利用方法など)を行っています。皆さんの参加をお待ちしています。

希望者は図書館2階カウンターまで!

## 資料紹介

### Academic Search Elite

EBSCO社が提供する電子ジャーナル(英語文献対象)。人文・社会など幅広い分野の学術雑誌約1,800誌の全文、約2,900誌のindex/abstractsを収録。学内のインターネット接続可能な端末から、図書館H.P.よりご利用いただけます。

### American Culture Series II ,1493 1875

1875年以前に刊行されたアメリカの歴史、哲学・心理学・宗教に関する基本文献2066タイトルをマイクロフィルム化した資料。

### 明治大正の読売新聞

明治7年の創刊から大正までの記事が、キーワード、日付で簡単に検索できるCD-ROMです。見出しだけでなく検索した記事も同時に閲覧できます。

# 図書館の統計

## I 図書館の推移

年度	区分	学生数	蔵書数	年間受入冊数	開館日数	貸出冊数	図書費
年	人	冊	冊	冊	日	千冊	千円
2002		2,931	214,826	3,364	271	18.4	33,805
2001		2,825	210,899	4,969	275	21.1	34,745
2000		2,549	205,652	4,479	274	17.9	35,805
1999		2,220	201,879	3,779	281	14.1	28,000
1995		2,137	163,506	13,438	271	21.5	39,700
1990		1,769	96,752	8,195	280	11.8	22,650
1985		1,005	51,000	5,043	284	10.1	12,399
1980		877	36,000	2,599	236	6.8	7,588
1975		763	22,000	4,265	183	3.5	3,754
1970		440	14,000	1,296	239	2.1	1,340
1968		256	10,000	2,838	[247]	[1.4]	[1,380]
1967		125	7,000		[247]	[1.4]	[1,380]

## II 蔵書冊数 (2003年1月31日現在)

	和書	洋書	合計
総記	7,443	1,392	8,835
哲学・宗教	15,779	14,691	30,470
歴史・地理	12,740	2,812	15,552
社会科学(含教育学・福祉)	59,297	18,936	78,233
自然科学(含医学)	7,568	1,325	8,893
工学(含家事)	4,135	469	4,604
産業	3,228	418	3,646
芸術(含楽譜)	5,860	843	6,703
語学	8,545	2,692	11,237
文学	32,676	12,936	45,612
その他	51	990	1,041
合計	157,322	57,504	214,826

## III その他の資料 (2003年1月31日現在)

絵本・文庫他(和書)	19,887	マイクロ資料	4,730
絵本・文庫他(洋書)	1,032	カセットテープ	1,245
和雑誌	464	ビデオ・LD・DVD	2,093
洋雑誌	167	CD	707
スライド	1,020	CD-ROM	102

## IV 館外貸出冊数(図書): 分類別 (2002年4月1日~2003年1月31日) 学生・院生・履修生のみ

	和書	洋書	合計
総記	526	6	532
哲学・宗教	2,290	56	2,346
歴史・地理	1,003	12	1,015
社会科学(含教育学・福祉)	7,572	26	7,598
自然科学(含医学)	1,080	0	1,080
工学(含家事)	365	1	366
産業	225	2	227
芸術(含楽譜)	622	8	630
語学	1,036	19	1,055
文学	3,043	12	3,055
その他	517	12	529
合計	18,279	154	18,433

## V その他(他館との協力等) (2002年4月1日~2003年1月31日現在)

資料借用	77(内学・院生29)	視聴覚室利用	2,314
資料貸出	33	コンピュータ学習室利用	80
複写受付	70	コンピュータ利用	2,367
複写依頼	448(内学・院生350)	文献検索受付	98(内学・院生55)
共通閲覧券	0		
紹介状発行	21(内学・院生10)		
紹介状受付	0		

## VI 館外貸出冊数・学科・学年別 (2002年4月1日~2003年1月31日現在)

	図書合計	雑誌・紀要	紙芝居	CD-ROM	カセット	CD
院・政策2年	156	7	0	2	0	1
院・政策1年	190	6	0	0	0	1
院・ア2年	211	3	0	0	5	0
院・ア1年	137	0	0	0	0	0
院・後期2年	150	5	0	0	0	2
院・後期1年	169	8	0	0	0	3
院・科目等	5	0	0	0	3	0
院小計	1,018	29	0	2	8	7
政治経済4年	744	34	0	0	0	0
政治経済3年	690	35	0	0	0	4
政治経済2年	677	10	0	0	2	0
政治経済1年	335	4	0	1	0	0
コミュニティ3年	392	1	0	0	0	2
コミュニティ2年	516	3	0	1	0	4
コミュニティ1年	185	0	0	0	0	0
欧米文化4年	605	5	0	0	4	14
欧米文化3年	685	7	0	0	22	5
欧米文化2年	415	2	0	1	2	9
欧米文化1年	463	25	0	1	1	15
日本文化4年	936	37	0	0	0	10
日本文化3年	874	17	0	1	11	4
日本文化2年	664	6	0	0	0	1
日本文化1年	762	13	0	0	1	9
児童4年	1,011	24	12	0	0	16
児童3年	1,321	15	6	3	0	2
児童2年	976	5	15	0	0	0
児童1年	547	0	5	0	0	8
人間福祉4年	1,291	60	0	3	3	9
人間福祉3年	1,369	49	0	4	3	9
人間福祉2年	1,034	11	0	3	0	19
人間福祉1年	725	3	0	0	0	4
科目等履修	198	13	0	0	4	0
大学小計	17,415	379	38	18	53	144
合計	18,433	408	38	20	61	151

発行・編集 聖学院大学総合図書館  
 〒362 8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号  
 電話 048 725 5461 FAX 048 780 1096  
 E-mail : lib@seigakuin-univ.ac.jp  
 URL : http://www.seigakuin-univ.ac.jp/scr/lib.asp